

## はじめに

「世界に対して胸を張って、日本の教育のこれはいいぞと言えるもの。まず一つは国民が教育を非常に重視している。第二に学習効率の高さ。三番目に先生の評価の高さ。四番目に人間形成をめざしている日本の教育。五番目に…」私が教員人生を歩むに大きな影響を受けた恩師の話です。昭和が突然の終わりを告げようとする頃でした。

時代は平成へと移り、国立青少年教育振興機構より、日本と米国・中国・韓国の普通科高校生の学習意識や学校生活の実態、及び将来の展望などを比較した「高校生の勉強と生活に関する意識調査報告書」が公開（平成 29 年 3 月）されました。

勉強の仕方について、「試験の前にまとめて勉強する」一夜漬けが多い。

勉強の時間も、学校の宿題とそれ以外の勉強（予習・復習）を「しない」が多い。

授業形態について、「教科書に従って、その内容を覚える授業」受け身的な授業が中心。

授業中の態度について、「きちんとノートをとる」が多く、発言やグループワークへの参加に消極的。「居眠り」も多い。

パソコンの利用、プログラミング、インターネットを利用して勉強することなど情報通信技術（ICT）の活用が少ない。

自然の中での体験活動、ボランティア活動、勤労体験活動、科学の実験や見学といった学習活動が少ない。また、これらの活動が好きだと回答した者も少ない。

人生目標について、多くの項目で肯定率が低く控えめな人生目標。

日本の特徴や課題を分析し、教育の向上に資する基礎データとして提示されたものです。七年前に行われた同様の調査との経年的な変化も比較されていました。

勉強の仕方について、「試験の前にまとめて勉強する」「問題意識を持ち、聞いたり調べたりする」「できるだけ自分で考えようとする」の割合が高くなっている。

授業形態について、生徒の発言やグループワークを重視する授業が多くなったと感じている。

先生の指導では、クラスのリーダーになることを重視するようになった。

人生目標として、「社会のために役立つ生き方をすること」の割合が年々高くなっている。

報告書は、高校生の勉強感が彼らの人生観にも色濃く反映しているようである、と結んでいます。

昭和から引き継いだ平成の教育も、ひと区切りを迎えようとしています。本校ではこの 2 年間、学力定着に課題を抱える学校現場として、各教科において主体的・対話的で深い学びに向けた研究に取り組んできました。教育活動全般においても共同学習の理解を通して、生徒の能動的な活動に向けた工夫をするなど、先生方の意識が高まっています。生徒もそれを敏感に感じているようであります。前述報告書のような詳細なデータはありませんが、日々の学校生活の中で子どもたちの変化を実感しています。不易流行を求め続ける先生方の研究心も、日本の教育の矜持の一つであります。

2018年2月2日

校長 平松 直哉